



文化学園リポジトリ

Academic Repository of BUNKA GAKUEN

服飾文化共同研究拠点／文化ファッション研究機構

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture / Bunka Fashion Research Institute

文化学園大学

Bunka Gakuen University

文化服装学院

Bunka Fashion College

文化ファッション大学院大学

Bunka Fashion Graduate University

文化外国語専門学校

Bunka Institute of Language

Title	Mink Coatに関する一考察
Author(s)	大石, 君子
Citation	文化女子大学紀要. 服装学・生活造形学研究 26(1995-01) pp.63-77
Issue Date	1995-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10457/2377
Rights	

Mink Coat に関する一考察

大石 君子*

A Study on Mink Coat

Kimiko Oishi

要 旨 多様化するファッションの中で毛皮が注目されている。ここ数年、急速な加工技術の進歩、発展により、新しい素材として生まれ変わって登場したのである。この新しい毛皮素材の扱いを解明するため、次の2点から検討を試みた。1. 我が国における1984～1994年のミンクのコートについて、デザイン、加工、縫製技法などを検討し、経年変化、傾向、特色をまとめ、実情を把握した。2. 代表的なミンク・コートの実物作品を分析し、市場調査と合わせてパターン、加工、縫製技法を検討した。結果は11年間のミンク・コートは、経年変化がみられ経年ごとに、よりソフトで薄く軽量化され、着やすさを追及して、カジュアルにも、おしゃれにも楽しむ傾向である。実物作品は防寒を目的とする総裏仕立の場合、縫製技法において経年変化に大差はなかったが、パターン、使用材料素材の加工からみると、軽量化の傾向は明らかであり、一方、おしゃれを目的とするリバーシブル仕立てのものは、素材の加工、縫製法において、ソフトで薄く、軽量化を計る傾向は顕著であった。

I 緒 言

ここ数年の毛皮服は、皮革と同様に、ファッションの1つとして目ざましい展開がなされている。加工技術の進歩、発達によって従来の毛皮という意識を変えざるを得ないほど、新しい感覚の素材として生まれ変わっているのが現状である。

被服構成の分野において、特殊素材として毛皮を扱ってきたが、今日のように新感覚でほとんど布地感覚の技法が可能になってくると、毛皮に対する扱い方の認識を新しくせざるを得ないことに気づいた。

そこで、我が国において毛皮素材がどのような過程を経て今日に至っているかを把握したいと考え、1984～1994年の11年間に限定し、代表的な毛皮服のミンク・コートを取り上げ、デザインや技法の経年変化や特色を分析し、現代の傾向を調査した。

またここ数年の傾向として、ソフトで薄く、軽量化され、着やすさが追及された点を実物作品を通して、パターン、使用材料、縫製技法について解明した。

II 研究方法

1. 我が国における1984～1994年のミンク・コートの傾向と特色

(1) 資料・文献資料^{1)～8)} 毛皮業界誌⁹⁾ 情報新聞¹⁰⁾ ファッションブック¹¹⁾¹²⁾

(2) 選出法・ミンクのコートに限定したのは多種の毛皮の中で、日本人にとって、毛皮といえばミンクに始まり、ミンクに終わるといえる程、一般的に親しまれてきた。そこで、資料の中から、年ごとの出現数が平均していること、毛足の長さも適切でデザインも広範囲であること、さらに服種は毛皮のボリューム、防寒、おしゃれな要素から圧倒的に出現数の多い事実に着目し、コートとした。

デザイン、技法、色など、写真から判定するため、写りのよい、なるべく前向きでわかりや

* 本学助教授 被服構成学

すいものを選出し、総点数312点のデータを取り上げた。

Ⅲ 結果及び考察

(3) 分類項目

- ① コートの種類と丈
- ② シルエット
- ③ 色
- ④ デザイン
- ⑤ 縫製技法
- ⑥ 加工, 特色

2. 実物作品の分析

(1) 1971, 1980, 1993年製作の防寒を目的とした総裏仕立について

- ① パターン
- ② 使用材料
- ③ 縫製技法

(2) 1993, 1994年製作のおしゃれを目的としたリバーシブル仕立について

- ① 作品の比較
- ② ミンクと刈ミンクについて

1. 我が国における1984～1994年のミンク・コートの傾向と特色

結果は次の通りである。

(1) 分類項目の結果 (図1)

① コートの種類と丈

コートの種類はA・ロングコート, B・ショートコートに大別し, 丈は膝あたりから足首までをロングコートとし, ヒップライン, マークのものから膝上までをショートコートとする。出現率はAが61%, Bが39%で約3:2の割合であったが, 年別にみれば1988年はロングの丈で, 自然色, フレアーのコートが流行していたことが顕著である。

② シルエット

シルエットについてはAライン, フルシルエット, テントラインのものをA・フレアースィルエットとし, 脇下直下, またはやや広がりをもたせたものをB・ボックスシルエットとし

表1 分類項目 (例)

1984	①コートの種類と丈	②シルエット	③色	④ デ ザ イ ン				⑤縫製技法	⑥加工特色
				えり	そで	身幅	接ぎ方向		
No.1	ロングコート	フレア	自然色	ヘチマカラー	ドルマン	ラップ ゆったり 大きい	身ごろ↓たて そ で↔よこ	総裏レット アウト	ラップ サッシュベ ルトつき
2	ショートコート	ボックス	自然色	シャツカ ラー	ドロップ カフスつ き。	普通	身ごろ↔ そ で↙カーブ	総裏レット アウト	丸い肩
3	ショートコート	フレア	自然色	スタンド カラー	ドロップ カフスつ き	ゆったり 大きい	身ごろ↓ そ で↓	総裏レット アウト	丸い肩
4	ロングコート	フレア	自然色	シャツカ ラー	アップ そで山タ ック	ゆったり 大きい	身ごろ↓ そ で↔	総裏レット アウト	
5	ロングコート	フレア	自然色	シャツカ ラー	アップ カフスつ き	普通	身ごろ↔ そ で↔	総裏レット アウト	丸い肩
6	ロングコート	ボックス	染色	シャツカ ラー	セットイ ン	普通	身ごろ↓ そ で↓	総裏レット アウト	
7	ロングコート	フレア	表 バーバ リー 裏 自然色	スタンド カラー	ラグラン	普通	身ごろ そ で	ライニング 仕立	トレンチ 裏 刈毛

た。出現率はAが79%、Bが21%で約4:1の割合、Bは年別の差がほとんどなくAが好まれている。

③ 色

色については写真のため、微妙な色の違いを判定することは困難であるため、A・自然色、B・染色のものに大別した。出現率はAが75%、Bが25%となり、3:1の割合であった。毛皮独特の自然色が大事にされていることはうなずけるが、1989年ごろから1990年代に入ると

染色技術が進歩して、染色しているか、いないか判別不可能なほど、自然さを強調したものがあると思われる。従って、予想以上に染色したものが多いと推測される。年別のバラツキはみられた。

④ デザイン

デザインについてはA・えり、B・そで、C・身幅のゆとり、D・毛皮の接ぎ方向に分類した。Dは毛皮独特のデザイン上、大きな要素となり、接ぎ方向が技法にまで影響されると考え、興味深く分類した。まずAでは定番がテーラードカラー、シャツカラー、へちまカラー、単発的にフラットカラー、セーラーカラー、ハイネックカラー、えりなしにトリミングしたもの、スタンドカラー、前端まで折り返したものの、フリルカラーなどが出現している。

1989年ごろになると、軽快に見えるハイネックカラー、スタンドカラー及び、えりなしが多く出現している。

Bについてはセットイン、アップ、ドロップ、ショルダーの他にラグラン、ヨークラグランなど、片寄りなく出現しているが、やはり1988年ごろからそで幅がより広くなり着やすくなっている。

Cはフレアーシルエットが多いことから解るように、全体に大きく、1988年ごろからは、さらに大きく立体的となり、着やすさはおる感覚のものも多くみられる。

Dは出現率をみると、接ぎのはっきり判別

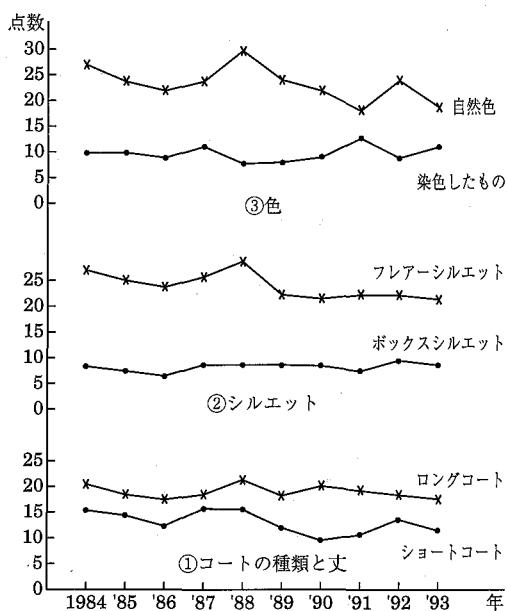
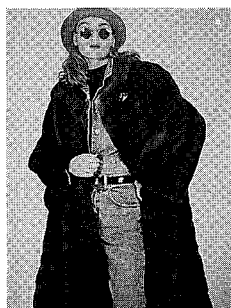


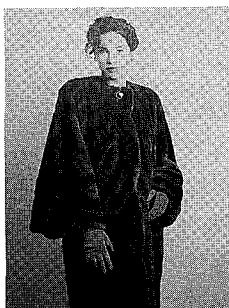
図1 分類項目の結果



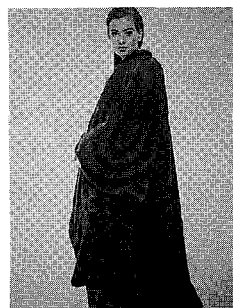
1 ↑↔ 28.6%



2 ↘ 21.6%



3 ↘ 18.9%



4 応用

図2 毛並み方向

できるもの68%、刈毛（毛足を短かくカットしたもの）などの加工をして、接ぎの見分けにくいもの32%であった。

さらに接ぎ方がはっきりしている68%については縦と横の組み合わせ28.6%、斜めが入ったもの21.6%、縦のみのもの20.5%、曲線の入ったもの18.9%、横のみのもの10.4%であった。（図2-1, 2, 3）

以上の結果は年別に平均して出現しているが、中でも曲線の入ったものは、経年ごとに複雑化し、新奇な雰囲気のものまで登場している。（図2-4）

⑤ 縫製技法

A) 仕立法

仕立て方法には総裏仕立、一枚仕立、ライニング仕立、リバーシブル仕立に分けられる。毛皮の種類、用途により仕立法も様々であり、1990年代に入ってソフトで軽く、着やすくなる傾向になると加工技術の進歩に裏付けられ、一枚仕立、両面使い（ダブルフェース、リバーシブル）のものが多く出現している。裏側にミンクなどの毛皮を、表側に布帛やレザーを使ったもの、またはその逆使いものなど、多様な素材に合わせて、それらに応じた技法が研究されている。

B) 接ぎ方法

毛皮の接ぎ方にはスキン・オン・スキン、レットアウト、レットイン、レザリング、その他が使われている。

• スキン・オン・スキン (Skin on skin)

ある面積の毛皮と毛皮を接ぎ合わせる方法でホールペルト (Whole pelt) とスプリット (Split) がある。前者は全皮の意味で、1枚の毛皮の背を中心に左右、同幅にナイフでカットして長方形にし、それを接ぎ合わせる。後者は毛皮を裂くという意味で、1枚の毛皮を背を中心に縦に2分して、左右対称、同幅にカットしたものを縫い合わせる。前者より後者のほうが同条件のものが2枚できるので、身ごろの左右に分けて使うと接ぎ目が目立たなく、自然な感じとなる。

• レットアウトとレットイン (Let out, Let in)

レットとは、1枚の毛皮の背の中心に、縦にカットして2分し、毛並みに合わせて背から腹の方向へ、斜めに5mm位の幅にナイフでカットする。テープ状のものができる。これを少しずつずらしながら専用ミシンで縫い合わせていく。

レットにはレットアウトとレットインの技法があり、前者は引き延ばして長さを増し、コート丈などの長さに調整する。後者はその逆で、縮めて幅を増す。えりなどの部分に用いる。これらの技法は表面からみると、切り伸ばし縫いして合わせているのがほとんど目立たない。

1枚の毛皮のように見え、むしろ、1枚皮より美しく効果的で高度な技法である。ミンクはレットアウトで縫製するのが一般的である。

• レザリング (Lethering)

細かくカットしたテープ状の毛皮と毛皮の間に革（カーフ、ビッグ、シープ、リボンなど）のテープをはめ込み縫い合わせる技法である。

毛足の長いきつねなどに用い、ボリューム感を押える効果がある。ミンクでも用いる場合があるが、使用枚数を節約したり、異素材と組み合わせて面白さをねらったものである。

1984年～1994年間をみると、全体的にレットアウト技法が用いられ、経年ごとに面白い接ぎ方が目立つ。レットアウトする角度を変えていくと、立体的で複雑な曲線を表現することが可能である。

1990年代に入って、スキン・オン・スキンによるミンク作品が出現しているが、刈毛して染色する場合、むしろ、自然の毛並みを合理的に生かしたものと考えられる。

C) その他の技法

経年ごとに布地感覚のデザインものが多くなる。染色や刈毛などの加工技術の進歩に伴って布帛同様の扱いが可能となったのである。

多様化する現代ファッションに合わせ、多種の技法が用いられている。

柄だし接ぎのパッチワーク（格子、縞、千鳥

格子、幾何学模様、絵柄など)、ねじり接ぎ、斜め接ぎ(シェブロン)、波型接ぎ、フリル、フレア、シャーリング、ギャザリング、タッキング、ブラウジング、ティアード接ぎ、つまみ縫い、スモッキング、スカラップ、スリット、パンツ、トリミング、異素材の組み合わせ(ニット、レザー、布帛など)、種類の違った毛皮の組み合わせ、毛皮の毛並み方向を変えた組み合わせ(なで毛と逆毛)、ミンクを糸状にして編んだもの、ネットにひも状のミンクを通して編み出したものまで、不可能なことがないかのように応用展開され、こうしたおしゃれの要素を追求する傾向は増々、強くなるものと推測される。

⑥ 加工

A) 染色(ダイング)

染色については、全体染、部分染、プリント染、グラデーション染、しぼり染、毛先染、など、またこれらをミックスし応用したものなどがみられる。

1990年に入ると、特に多色、多種類で、刈毛、抜毛の加工技術によって、より染色しやすい素材となり、高度な染色を可能にしたものと考えられる。

B) 刈毛(シェアリング)

刈毛とはシャードリングマシンを使って毛足を一定の長さに刈り込むことで、1990年代に入って特に多くなった。

C) 段刈り(ウィーゼル)

毛足に段差をつけて刈り込むことで応用として型押し柄のように凹凸をつけて、柄を浮き出すことも可能である。

D) ビロード加工(ベルベット加工)

専用ブラシで2回のシェアリングをする。この作業によって、毛皮はより美しく艶やかにしなやかに軽くなる。

E) 抜毛(ブラッキング)

ローラーマシンで刺毛を引き抜き、綿毛はそのままの長さで残しておく。適度にやわらかくなって、しかも自然さを残すことができる。

F) 刈毛と抜毛の併用

刈毛をしてから、さらに刺毛をカットする。絹地のように柔らかくなる。

G) 両面使いの加工(ダブルフェース、リバーシブル)

一枚仕立に用い、両面を使うことができる。表面を毛皮、裏面をレザーとか布帛に、またその逆を、ステッチや接着糸などで止め付け、1枚のように加工する。もう1つは1枚毛皮の皮の部分に染め、その上に樹脂加工したものをナパといい、皮の部分に染め、起毛させたものをスエードという。

1990年ごろから、軽量化をはかるため、多彩に展開されている。

H) 穴あけ(パンチング)

皮の面から型押しのようにマシンで穴を開ける。レースのように細かな穴が開き、軽量化をはかったもので、さらに毛足は刈毛する。一見、毛織物かニットのような風合いとなる。

(2) まとめ

現代の毛皮ファッションの傾向を11年間に限定してみたが、さらに情報誌、新聞を参考に、1970年代に遡って表2にまとめ考察した。

① 1970年代終わりから1987年ごろは毛皮本来の扱い方をした時期であるといえよう。即ち、毛皮特有の防寒を目的とした用い方、毛足をそのまま用い、染色をしない自然色、基本的な縫製技法が多い。

② 1988年に染色したビーバーの刈毛が登場すると、即ミンクへの応用を試み、以後、刈毛加工が展開された。従来の毛皮にはない新しい感覚の素材として生まれ変わり、以後の毛皮ファッションに大きな影響を及ぼすことになった。

③ 刈毛加工が始まった1988年ごろから現在まで、あらゆる毛皮ファッションの展開期である。

染色や加工技術の進歩によって布地感覚で、アイテム、デザインが自由に応用され、現代人の生活やニーズに合わせて、ソフトで薄く、軽くはるような着心地が好まれている。

④ 今後、21世紀の毛皮ファッションの方向

表2 毛皮ファッションの傾向

西暦	和歴	毛皮の動向・傾向・特色
1978	昭和51	毛皮ブーム、カジュアルファー出発となる、ミンク専用の接ぎ合わせミンク開発
1980		ミンク関税引き下げ、レットアウト用カッティングマシン開発、わが国でも毛皮を楽しむ時代となる
1983		毛皮とナバ、スエードのダブルフェイス、リバーシブルが主流、コンピューター毛皮縫製、レットアウト専門マシン開発
1984	59	50年代エレガントルック、毛皮らしい毛皮が多い、快適さ、動き易さの追求
1985	60	ファーヤーン開発、毛皮ニット製品登場、これはライナー不要、リバーシブルに着られ、編みかえ可能より軽く、ソフトに
1986	61	毛皮素材の広がり、手作業のしぼり染、スクリーンプリント染め登場
1987	62	毛皮はふだん着傾向となる、ワシントン条約、国内法制定
1988	63	染ビーバーの刈毛登場、以後刈毛加工へ展開
1989	64	モードのトレンドテーマ「エコロジー」となり、色・素材ともナチュラル志向、快適環境への憧れ、動物保護の視点で毛皮を再認識
1990	平成2	90年代キーワード「エコロジー」土に帰る天然素材として毛皮が脚光を浴びる、毛皮のカジュアル化
1991	3	ソフト・ライト感覚、多彩に展開
1992	4	素材の広がり、多彩な組み合わせ（カシミヤ、シルク、ツイード、ニットなど）
1993	5	よりカジュアル化、ソフト、ライト着やすさの追求、刈毛、カシミヤにトリミング主流、パンチング（穴あけ）人気
1994	6	より色彩、風合い追求、よりソフト、ライトに楽しい毛皮の展開

は引き続いて現代人の好む、よりカジュアル志向になり、ソフトで薄く、軽量化され、さらに着やすさが追及される傾向が強まるものと推測される。その一方で、伝統的な毛皮扱いをしたものとして、毛皮の優雅な毛足と色を自然のままに用いたものは永久に残されていくものと思われる。なぜなら、いつの時代においても、毛皮素材の持つ、暖かさと華やかで神秘的な美しさは人々を魅了してはなさないからである。

2. 実物作品の分析

(1) 防寒を目的としたもの（総裏仕立）

1971, 1980, 1993年製作のミンク・コートをお、a, b, cとする。図3はデザイン、パターン、表3はパターンの寸法と使用材料を分析した結果である。図4は縫製技法としてbを例にあげて図解した結果である。

① デザイン

a, bは基本型、テーラードカラー、シングルブレスト、毛足はそのままのミンクである。

Cはへちまカラー、ダブルブレストの刈毛の

加工をしたミンクである。ミンクはオスが大きく、堅くて重い。メスは小さめで柔らかく軽い。念のため、それぞれの重量を測定してみると、オス、メスの違い、コートの着丈の違い、使用枚数の差、他の材料との関係、刈毛の加工やなめし方による違いなど条件によって一概に比較することは不可能であるが、表3が示すように経年ごとに軽量化する傾向であった。

② パターンとパターンの寸法

メジャーと定規で計測し、個所によっては和紙を当て形を抜き取って展開した。こうしてできたパターンの形態と寸法を比較した結果、明らかに経年変化がみられた。即ち、経年ごとに大きく、着やすくなっていることが理解できる。

③ 使用材料

・表3のように、1971年の裏布は厚手の絹サテンを使い、1993年になると薄手の綾絹になっている。前芯、裏えり芯の材質も同様に硬く重いものから、経年ごとにソフトで軽いものに変

Mink Coat に関する一考察

表3 実物作品の分析 (No. 1)

単位 cm

No.	項目		作品		a. 重量1.82 kg 1971年製作		b. 1.64 kg 1980		c. 1.04 kg 1993				
パ タ ー ン 寸 法	1	着	た	け	67.0		70.0		75.0				
	2	後	ろ	えりぐり	9.3×2		9.5×2		9.5×2				
	3	背		幅	18.5×2		19.5×2		22.0×2				
	4	後	ろ	身	幅	24.5×2		26.5×2		31.0×2			
	5	肩		幅	11.0		12.0		15.0				
	6	胸		幅	18.5×2		19.5×2		21.0×2				
	7	前	身	幅	24.5×2		27.0×2		30.5×2				
	8	W		寸	法	43.5×2		57.0×2		58.5×2			
	9	H		寸	法	53.0×2		60.5×2		59.0×2			
	10	そでぐり 寸法	前	後	47.0	23.0	51.5	25.5	65.0	32.0			
	10			後		24.0		26.0		33.0			
	11	そ	で	た	け	62.5		58.0		60.8			
	12	そ	で	山	の	高	さ	15.5		18.0		20.5	
	13	そ	で	前	幅	34.0	38.5	16.5	57.5	27.0			
				後				17.5		20.5	30.5		
	14	ひ	じ	線	の	幅	32.5		34.5		48.0		
15	そ	で	口	の	寸	法	35.5		33.5		37.0		
16	パ	ッ	ト	の	厚	み	パットなし		三角パット1.5		くりパット2.0		
使 用 材 料	裏			布	絹サテン (厚手)		サテン織り裏地		綾絹 (薄手)				
	裏	打	ち	布	全面, 絹オーガンジィ		全面ドット芯		部分に接着芯トリコット				
	前			芯	毛芯 (厚手)		なし ラベルのみドット芯	薄手ドット					
	裏	え	り	芯	毛芯 (厚手)		毛芯とドット芯		薄手ドット				
	見	返	し	芯	不織布		なし		なし				
	表	え	り	芯	不織布		なし		なし				
	の	び	止	め	テ	ー	プ	接着テープ (綿)		接着テープ (綿)		薄手, 接着テープ (綿)	
	バ	イ	ア	ス	テ	ー	プ	同色染テープ (2.0幅)		同色染テープ (2.0幅)		なし	
	し	つ	け	糸	綿糸		綿糸		地縫い糸				
	ま	つ	り	糸	絹まつり糸		絹まつり糸		絹まつり糸				
ポ	ケ	ッ	ト	袋	布	裏布		別珍 (綿)		裏布			
カ	ギ	ホ	ッ	ク	小2セット		小2セット		ボタン8個				

化している。

・見返し芯, 表えり芯はb, cになると省略されている。

・バイアステープはcになると使用されていない。

・裏打ち布の目的は表の素材を生かし, レッ


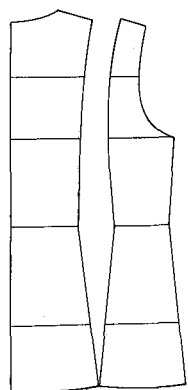
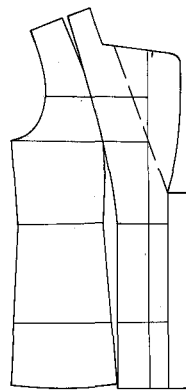
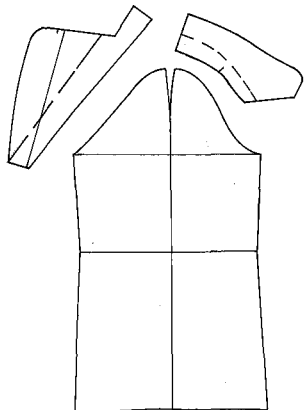

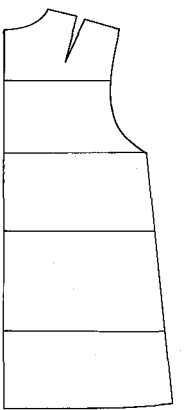
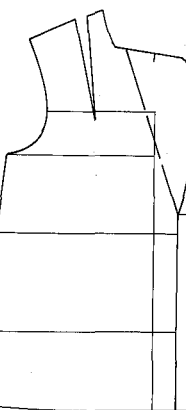
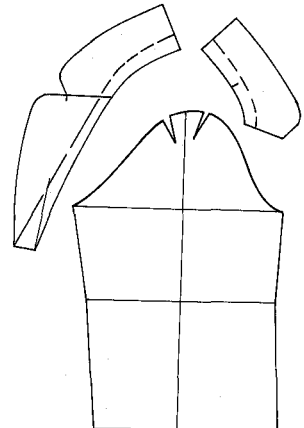
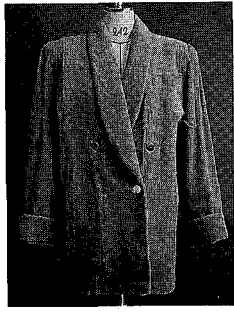
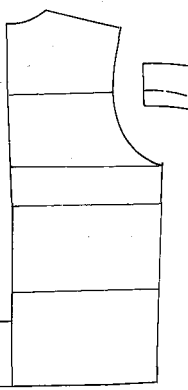

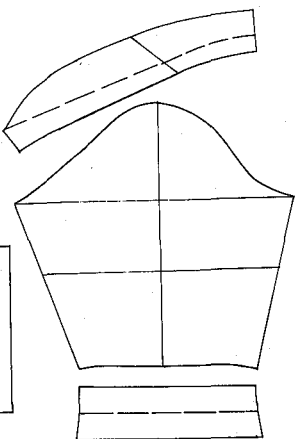
	デザイン	パターン		
<p>a</p>  <p>重量 1.82 kg 1971年製作</p>				
<p>b</p>  <p>重量 1.64 kg 1980年製作</p>				
<p>c</p>  <p>重量 1.04 kg 1993年製作</p>				

図3 実物作品の分析

Mink Coat に関する一考察

トアウトの糸の当たりを防ぎ、または補強するためである。

◦裏打ち布はaはオスのミンクで硬く重い
ため、絹のオーガンジィ, bはメスのミンクで

しなやかさを生かすため、ソフトで厚みのある
ドミット芯, cはスキン・オン・スキンの接ぎ
方をした刈毛ミンクである。その接ぎ目に部分
的に、さらに薄く軽いトリコットの接着芯を用
いている。

◦市場調査の結果、この他に、毛皮はレット
アウトされたままで、裏身ごろの裏布の裏面に
裏打ち（ハイモなどの木綿の平織）したものも
あった。

以上、いずれにおいても、経年ごとに材料面
で、ソフトで薄く、軽くなる傾向であることが
理解できる。

④ 縫製技法

現状を市場調査してみると、bの縫製技法に
近いものが多数であり、一般的と思えたので、
bを図解し、a, cの相違点を比較した。

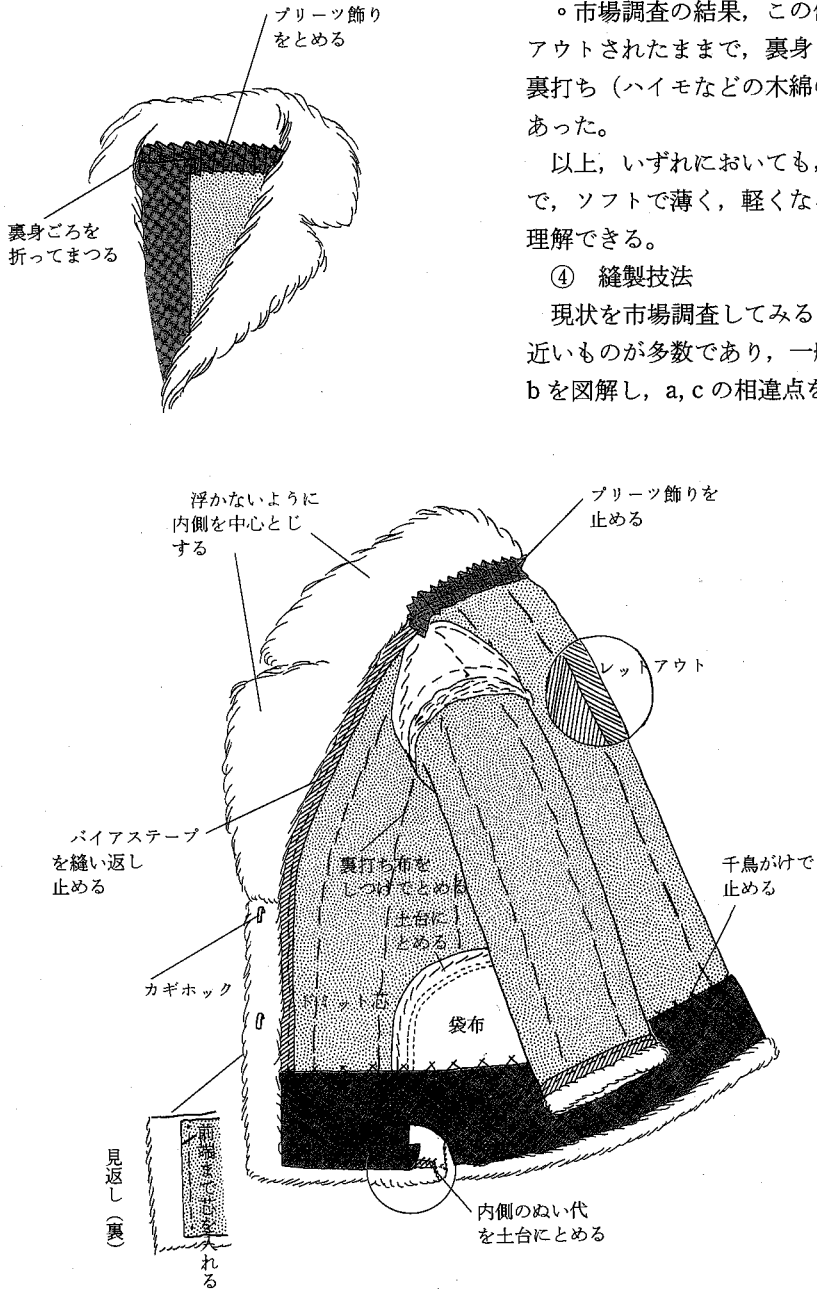


図4 b縫製技法(裏面)

1. 裏打ち布の止め方は、よくなじませて綿糸で粗く、置きじつけ、または八刺しの要領で止め付ける。他の芯の止め方もこれに準じている。

cは接ぎ目の上に接着芯を接着している。

2. 見返し奥から後ろえりぐりとそで口のしまつは同色に染めた綿のバイアステープを中表に縫い返し、端は返し針で土台に止める。aは同じ、cはテープを省く。

3. 見返し、ラペル、えりの内側に中とじをする。それぞれ、縫い返してから、幅が浮かな

いように内側をめくり、2, 3列に中とじを入れておく。

4. すそのしまつは裏身ごろの共布で、広幅のバイアステープを付ける。中表に縫い合わせ、縫い代を土台に止め付けておく。テープを返し上端を折って、千鳥かがりで土台に止める。cは同じ、aは2の方法でしまつする。

5. 前端にカギホックを付ける。毛皮に穴を開けて、カギホックのカギを出し、土台は裏側でしっかり止め付けておく。cはボタン止めであるため、裏布で縫い返した玉縁穴を作る。

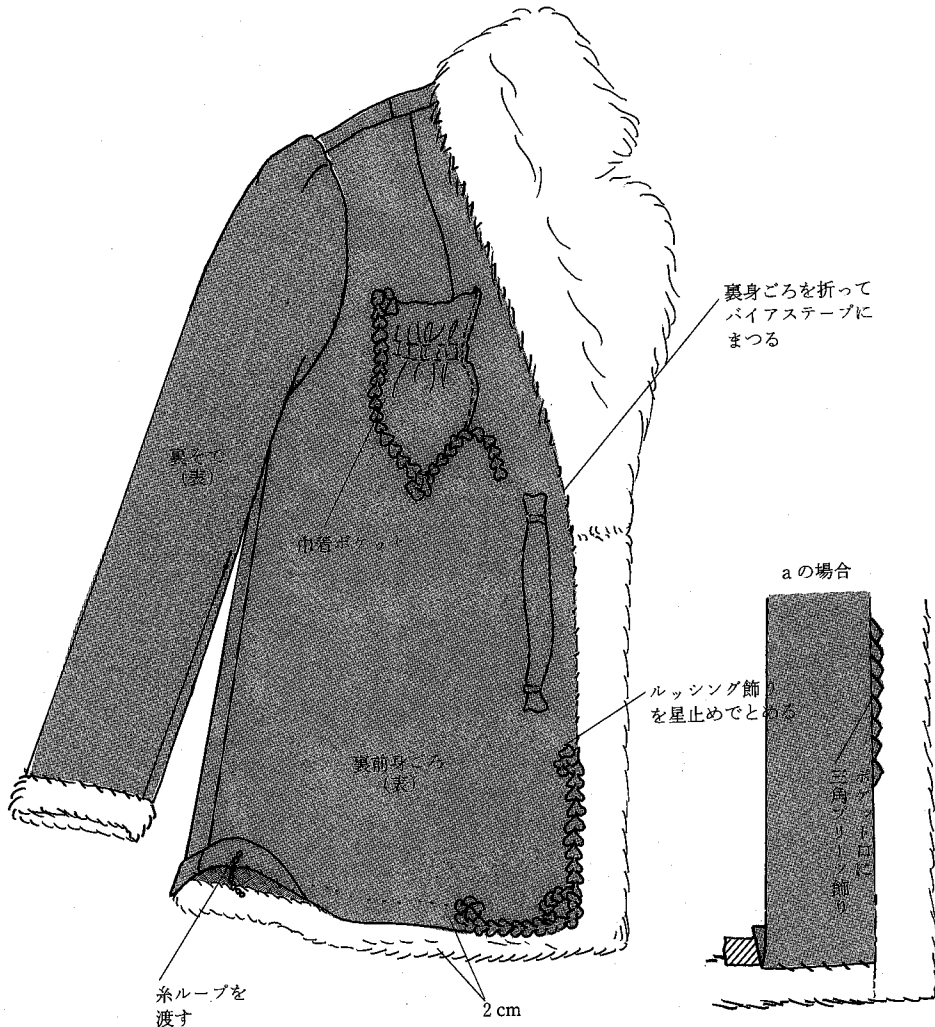


図4 b 縫製技法 (裏身ごろを付けたところ)

6. 後ろえりぐりにプリーツ飾りを付ける。裏身ごろの共布でプリーツ飾りを作り、後ろのえりぐり部分に止め付ける。

7. 裏身ごろを作る。縫い目は0.5 cm のきせをかける。左裏身ごろの胸もとに巾着ポケットを作る。ポケットの周囲にはルッキング飾りをのせ、星止めの方法で止める。aは見返し奥に三角のプリーツ重ねの飾りをはさみ、縫い目利用のポケットを作る。cは内ポケットを省略している。

すそは表(毛皮)より、2 cm 短く、三つ折りしてまつる。

8. 裏身ごろを付ける。見返し奥から後ろえりぐりとそで口は縫い代を折って、バイアステープ、プリーツ飾りにかぶせてまつる。aは同じ、cは中表に縫い合わせ、縫い代を土台に止める。

9. すそのしまつは、ふらし仕立、縫い目のある箇所に長めの糸ループを作り、表身ごろ(毛皮)と裏身ごろに渡す。見返し奥から前すそ線にかけてL字型のルッキング飾りをのせ、星止めの方法で止め付ける。cは同じ、aは、バイアステープを付けておき、かぶせてまつる。

以上、a, b, cの縫製技法を分析した結果相違点としては

- 見返し奥やそで口にバイアステープを使用するか、しないか。使用するならば、かぶせてまつる。使用しないならば、縫い返し方法である。

- すそのしまつをバイアステープを付けてまつるか、広幅の共布バイアスを縫い返して上端を折ってまつり、裏身ごろをふらして、糸ループを付けるか。

- 内ポケットのデザインの違いなどである。縫製技法は、デザイン、使用する材料によって、それぞれに応じた技法を使い分けていることが理解できる。

⑤ まとめ

パターン、使用材料、縫製技法から分析した結果、次のことがいえる。

全体的に経年変化がみられた。即ち、経年ごとにソフト感を大切に、軽く、薄く、そして着やすさを重視する傾向であった。特に、cは刈毛の加工をしたミンク素材であるため、軽量化については顕著であった。縫製技法については、防寒目的の総裏仕立を対象としたため、基本的なものに限られ、経年ごとの差がはっきりみられなかった。これは市場調査の結果から、防寒用の場合は、伝統的縫製法を守り通しているということが解り、今回の結果と一致していることが判明した。裏身ごろのルッキング飾り後ろえりぐりのプリーツ飾りなどの装飾はそのよい例であろう。

(2)おしゃれを目的としたもの(リバーシブル仕立)

布帛とミンクを使って、両面着られるように仕立てたものである。1993年、1994年製作のリバーシブル・コートをもd, eとする。(図5)。表4は使用素材の諸元と加工などを分析した結果であり、図5, d, eは縫製技法を図解した結果である。

① d 作品について

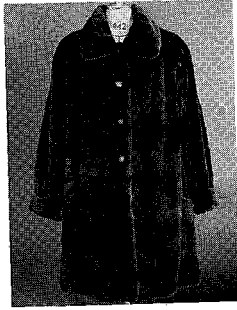
デザイン・着丈95 cm, Aライン、フレアシルエット、えりはミンクと布帛で縫い返し、幅2つ折りし、えり外まわりがわとなり、えり付けにギャザリングしたシャツカラーである。

打ち合わせはシングルブレスト、両面に金具ボタンとくるみボタンを付け、玉縁穴を作る。

そではドロップショルダーのパフスリーブ、そで口は折り返しのできる広幅カフスをつける。

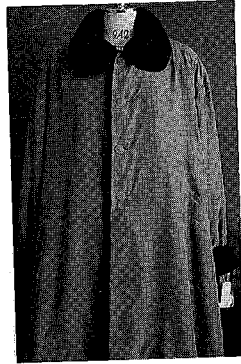
素材・厚手の絹(絹100%, 平織)と刈毛ミンクの組み合わせ、絹地には、全面、ハイモ(木綿、平織)で裏打ちがされ、刈毛ミンクはスキン・オン・スキンの接ぎ合わせ、その部分のみに接着心を帯状に補強している。

縫製・布帛とミンクを別々に仕立てておくがミンクを主体とする。えりとカフスはミンクの方に縫い付けておく。前端は布帛をでき上りに折り1 cm 奥をまつる。ミンクの毛足がトリミングのように、長く出ている。えりは布帛側に



d 作品

刈毛ミンク面



網面

糸ループで止め、そで口も布帛側でまつる。すそ線はふらし仕立てにし、糸ループで渡し、セットする。

中とじはそでぐりの脇下、脇線のウエストライン1ヶ所に閉じておく。

② e 作品について

デザイン・着丈65 cm、たっぷりしたブルゾンのコート、小さめのショールカラー、浅いダブルプレストの打ち合わせ、前端は皮にゴムをはさんだループを付け、ボタンをかける。そではドロップショルダーでパフスリーブ、そで口

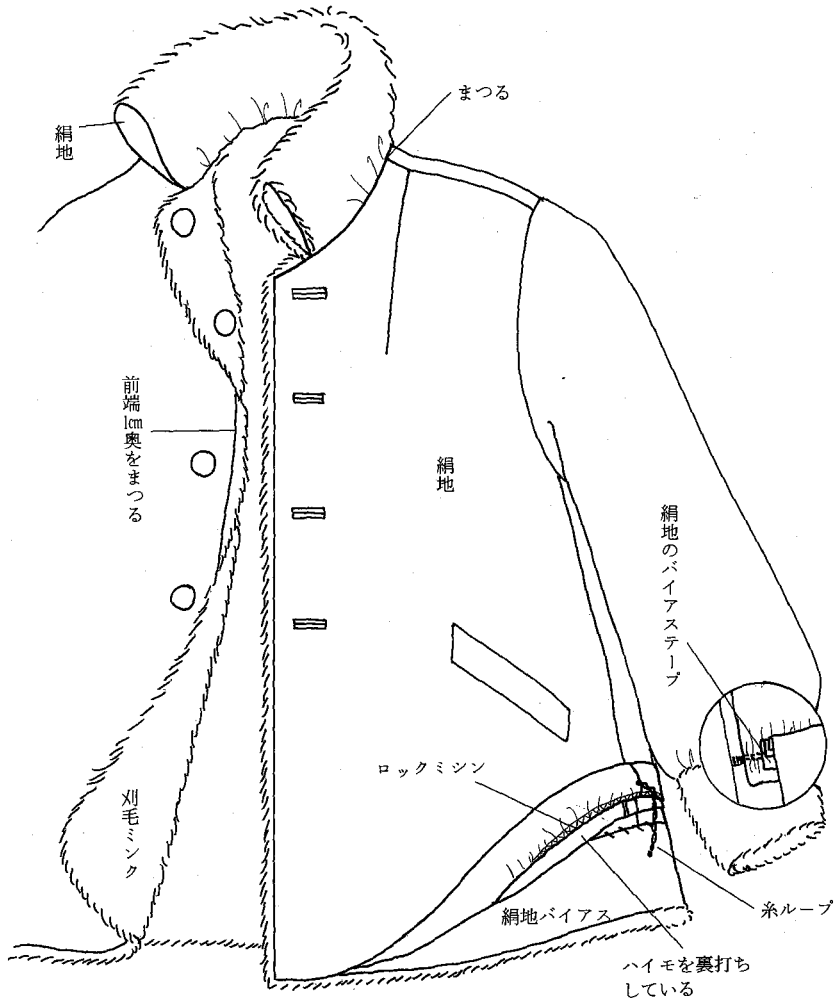
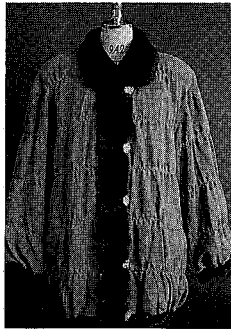


図5 d 縫製技法

Mink Coat に関する一考察



e 作品
ミンク面



絹面

とすそ線にゴムテープを通しブルゾンさせている。

素材・薄手の絹（絹100%，平織）とミンク（毛足そのままのもの）の組み合わせ、絹地には前もって、ゴムカタン糸でシャーリング（収縮率16%）加工をしたものである。ミンクはスキン・オン・スキンの接ぎ合わせ、横段に細いテープ状のミンク（色、毛並みを変化させたもの）をはさみ、面白さを出している。

縫製・布帛とミンクを別々に仕立てるが、ミンクを主体とする。えりはミンクの方に縫い付

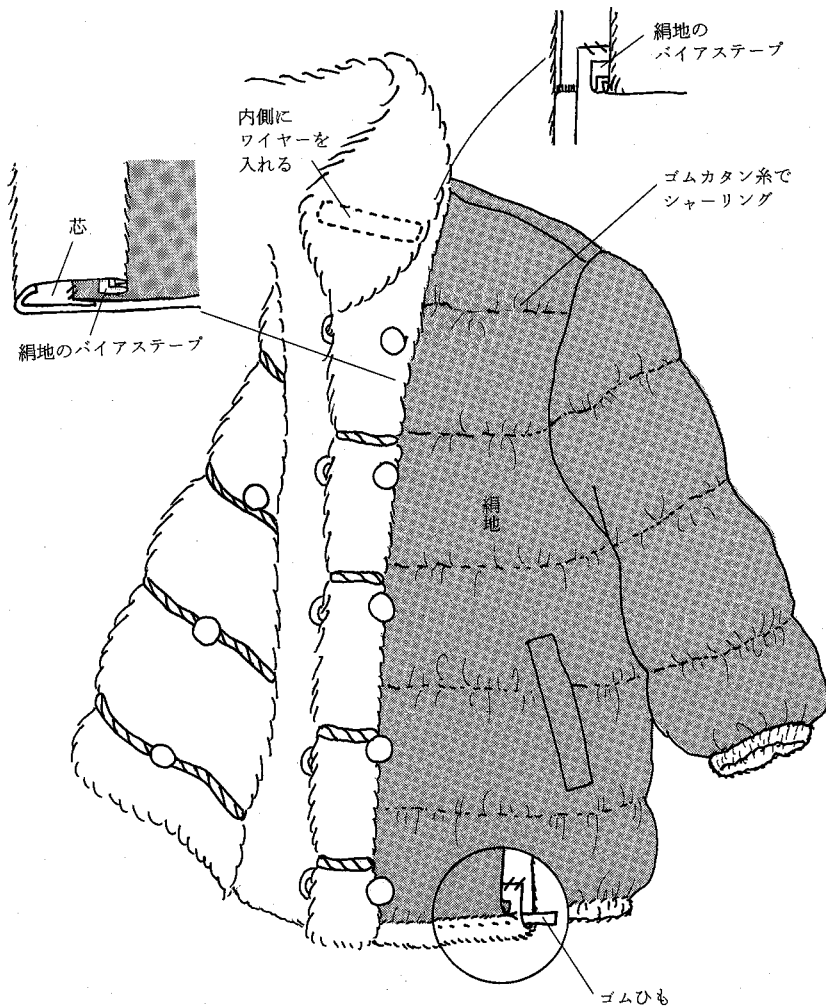


図5 e 縫製技法

表4 実物作品の分析 (No. 2)

	使用材料	加工, 接ぎ方	厚み(mm)	重量(kg)	その他の材料
d 1993年 製作	絹地 絹100%平織	ハイモ(綿100%)で裏打ち	0.43	1.57	金具ボタン くるみボタン 接着芯
	刈毛ミンク	スキン, オン, スキン 刈毛	1.20		
e 1994年	絹地 絹100%平織	横段10 cm 間に収縮率16%のゴムシャ ーリング	0.24	1.80	金具ボタン ワイヤー ゴムテープ 接着芯
	ミンク	スキン, オン, スキン	1.72		

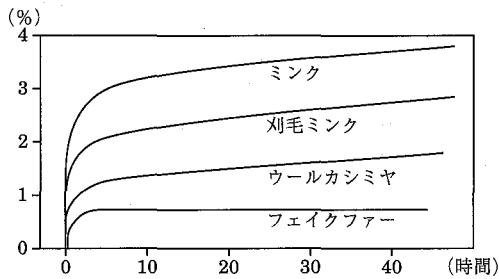


図6 吸湿度テスト (湿度65%→79%)東京都立皮革センター実験より

け、布帛側でまつる。前端はミンクをでき上がりに整え、見返し奥に布帛の共布でバイアステープを縫い返しておき、布帛の方をこの見返しの下に入れてまつる。そで口とすそ線はミンクをでき上がりに折り、ぬい代にゴムテープを止め付ける。布帛のそで口とすそ線は2 cm 短かく折って、バイアスで処理した毛皮のきわにまつる。

中とじはdと同様である。えり先の内側には両面から、なじみ加減を調節できるように、またしっかり保形できるように、毛皮専用のワイヤーをとり付けている。

③ dとeの比較

縫製技法はデザインの違いはあるが、d,eとも共通している。即ち、リバーシブル仕立ての基本であるが、両面をそれぞれ、仕立てにおいて、外表にセットする。主体とする方に、えり、カフスなどを縫い合わせておき、もう片方はえり付け、カフスをまつる。前端とすそ線は

まつり付けるか糸ループで止める。さらに必要箇所の中とじを入れる。

素材は布帛は絹地で共通であるが、厚手絹地にハイモの裏打ち、薄手絹地にゴムシャーリングをして布を充分に使用したもの、毛皮は刈毛ミンクとそのままのミンクの違い、接ぎ方はd,eともスキン・オン・スキンである。

素材の厚みを測定してみると表4に示す通りである。布帛、ミンクとも違いが読みとれる。

重量を測定してみると、eよりdが軽い。dは着丈が長く、ハイモの裏打ちをしているにもかかわらず、軽い。また、総裏仕立てのcについては1.04gと、さらに軽い。即ち、刈毛ミンクであることが原因であると考えられる。

④ ミンクと刈毛ミンクについて

実物作品の分析から、刈毛ミンクはミンクより、薄く、軽いことが理解できた。では毛皮の暖かさ(保温力)、肌ざわり(ソフト感)、さらに着心地よさ(吸湿性)についてみていくと東京毛皮商工業協同組合によるテスト実験によって、保温力は刈毛ミンクよりミンクが優れている。ソフト感はミンクより、刈り毛ミンクが優れていることが証明されている。さらに、着心地よさをみていくと図6に示すように、ミンク、刈毛ミンクとも優れている。つまり、ウールのカシミヤより、フェイクファーより、大きく差をつけ、暖かくてむれず、毛皮に優るものはないと言えよう。

⑤ まとめ

おしゃれを目的としたリバーシブル・コート

2点を分析した結果、デザインは違っても、縫製技法に大差はなかった。素材面で厚み、重量を測定してみると、刈毛ミンクが薄く、ソフトで軽く、軽量化をはかり、多様化する毛皮服にふさわしい素材であることが理解できた。

市場調査の結果、増々、軽量化が進み、着やすさを追求し、おしゃれの要素を求める傾向は強くなっているが日本独自のものであることがわかった。海外においては厳しい自然条件の中で、軽量化より、防寒が重要であり、従来の伝統的な扱い方がなされているということであった。

Ⅳ 総 括

今日、従来の毛皮と違って、新しく素材開発されて登場した毛皮服が、ファッションの分野で脚光を浴びている。目ざましい加工技術の進歩により、布地感覚で扱えるようになっている。

被服構成の立場から、特殊素材として扱ってきた毛皮素材について、実情に合わせた扱い方を把握したいと考え、次の2点から検討した。

1. わが国における1984～1994年の毛皮服(ミンクのコート)について、経年変化、傾向、特色をまとめた。
2. 実物作品を分析し、ここ数年の傾向と特色について解明し、実情を把握した。

結果は次の通りである。

① わが国における11年間のミンク・コートについて、明らかに経年変化がみられた。1990年代に入って、加工技術の進歩によって、刈毛やダブルフェースなどの素材開発がなされ、そうすると布地感覚で扱うことが可能となった。よりソフトで薄く、軽量化され着やすさを追求し、現代人の求めるカジュアル志向に、またおしゃれの要素を追求する傾向が明らかとなった。

② 実物作品、1971、1980、1993年製作のミンクのコート、防寒目的の総裏仕立てのものについて分析した結果、経年変化がみられ、バ

ターン、使用材料から、薄くソフトに軽くなる傾向がみられた。縫製技法からみると、経年変化に大差がみられないが、その原因は伝統的な縫製法を守り通している実情と一致した。

1993、1994年製作の実物作品、おしゃれ目的のリバーシブル仕立てのものについて分析した結果、2枚合わせるために、素材の厚みと重量について検討したが、刈毛ミンクがソフトで薄く、軽く、適した材料であることが理解できた。

さらに市場調査の結果も合わせ、軽量化をはかり、おしゃれな要素を追求する傾向は、日本独自なものであることが判明した。

以上、毛皮素材、ミンクについて検討を試みたが、今後も現代人の生活に合わせて多様化するファッションの1つとして、魅力的な毛皮素材の行方を見守っていききたい。そして被服構成の立場から毛皮素材の扱いをさらに深く研究していききたいと思っている。

終わりに本研究について、助言をいただきました本学、中屋典子教授に深く感謝致します。

参 考 文 献

- 1) 毛皮の世界 David Gordon Kaplan 著、諸橋アイ子、樋口洋子訳、1977、河北出版
- 2) 毛皮への招待 嶋田良子著、1979、読売新聞社
- 3) The 毛皮 守屋健郎編集、1980、読売新聞社
- 4) ファーファッションライフの創造 山岡富美江著、1987(株)IN 通信社
- 5) 毛皮の本 中村喜代次、西川勢津子共著、1986、文化出版局
- 6) ミンクへの招待 嶋田良子、1986、サンケイ出版
- 7) 毛皮テクニック 八重嶋佳枝、ベギーボラック共訳、1981、フランス毛皮協会編河北出版
- 8) 毛皮の選び方と手入れ 出倉恵美子著、1992、大泉書店
- 9) 毛皮ジャーナル 1976、2(1号)～1994、8(215号) 河北出版
- 10) 毛皮新報 1977～1993、日本毛皮協会発行
- 11) fur ARPEL 1984 No. 11～1993 No. 65
- 12) L'OFFICIEL 1984 No. 706～1993 No. 776